プロティノスプロティノスの
「魂の本質第一編」IV-2-(4)

1
魂の本質がいった何であるのかを探求しながら、われわれはそれが物体ではないことを示し、さらにそれが非物体的なものの調和:ピュタゴラス派の見解

物体である:ストア派の見解)
非物体的なものの調和:ピュタゴラス派の見解

そしてさらに、それをエンテレケイア(現実態)とする説も、言われているような意味では、真実を語っているのでもなければ魂の本質を明示しているのでもないとして、これを退けた

アリストテレス
学派の説

そしてそのうえでわれわれは、「魂は知性的なものに属し、神の領域の一員である(『パイドロス』230a5)」と主張したのである

おそらく、われわれのこの主張は、魂の本質を明確に言い表わしていると解してよいであろう

たしか、あの時には、諸存在を<感性的なものの>と<知性的なものの>に区別して分類し、魂を知性的なものの部類に属せしめたのであった

しかし、われわれはさらに先へと進み、この問題をより深く追求していかねばならない

そこで今は、魂が知性的なものの部類に属することを認めたうえで、他の道をとおって、<魂の本性を神的にあるわし、ているものの>を追求していくことにしたい

12 では、次のように言ってみることにしよう。すなわち、「魂も種の存在(感性的諸存在)は<第一義的な意味で分割可能なもの>であり、<その本性においては分割不能なもの>である

そしてそれらのものの部分は、いかなる部分であっても他の部分と同じではなく、また全体とも同じではないのであって、それらの部分は全体よりも、すなわち全体よりも小さくなければならないのである

そして、それらは<感性的な大きさを持っているものっであり、<真のあるもの>であって、そのそれぞれが自分に固有の場所を持ち、同じものが同時に多くの場所にあることはできないのである>と

30 かくて、一方には、知性的なる諸真実在のなかで最高の位置を占めている<第一義的な意味での不可分なるもの>があるとともに、他方には、<感性界に位置をあのもって、あらゆる点で分割可能なもの>があることになる

分割されない知性について

16 しかし他方には、これと相反するあり方をしているもの(知性)があるのである

それは<決して分割を受け入れないもの>すなわち<部分のないもの>であって、たとえ考えの习えでのことであっても、

いかなる広がりも受けいれず、場所を必要とせず、部分的にも全体的にも(感性的な)諸存在のいかなるもののなかにも生ずることのないものであり、

いわば(感性的な)すべての存在の上に同時に位置を占めているのである

21 しかし、感性的な諸存在を足場としているから、そのように言われるのではなくて、それはしかしでは他のものにはあることもできないし、あることを欲しもしないから、そのように言われるのである

そしてそれが、<常に同一の状態を保っているウーシア(有)なのである>

すなわち、それはいわば円の中心のようなものであって

——つまり、円の中心から円周にむかう半径はすべて、その中心を自分の生成と存在の根拠としながらこれに依存しているけれども、その中心はそれ自体でとどまっていることが可能なのであって、半径はすべてその中心点にあずかってその不可分点を自己の始原となし、自己自身をその中心点依存させたら(円周へと)進んでいるのであるが——

自己自身に続くものにあまねくゆきわたっているのである

物体に内在するエイドスは分割可能

32 しかし、それらとは別に、感性的な事物のかなり近くに位置を占め、感性的な事物に従っては いらないけれども、<感性的な事物よりもいっそのビュシス(もの)>が、

つまり物体が分割されると、その物体に内在しているエイドスも分割されるのであるが、しかしそのエイドスは、分割された物体のそれぞれの部分に全体とともに内在しているのである

すなわち、物体に内在するエイドスは<あらゆる点で分割可能なもの>であるから、物体内で分割されたエイドスのそれぞれはたがいに他から完全に分離し、多くのしかも同じエイドスとしてあるのである

だからこそ、このエイドスも<あらゆる点で分割可能なもの>とみなされなければならないのである

すなわち<物体のように第一義的な意味で分割可能なものではないけれども、物体のなかでは分割可能なものとなるものっがあるのである

τὸ εἶδος(ト・エイドス)、「種的形相」はプラトンの言う「諸物体の領域に生じる分割可能な有」

——たとえば色彩その他のあらゆる性質とか、<他のものと影響をともにする部分をもっていないので、多くの分離している諸物体に全体として同時に内在している個別的な形姿>とかが、これに相当するのであるが——

魂は知性から不可分性を引き継ぎながら分割可能な諸物体に宿る

しかしさらに、あの<まったく不可分なビュシス(もの)(として)の知性)>の近くに、<その不可分のものから発して>その不可分のものの>から発出して別のビュシス(もの)へと急ぐことによって、両者すなわち<不可分で第一位のもの>と<諸物体の領域にある分割可能なもの>、

それはあの<不可分なものから不可分性を得ていないけれども、その<不可分のものの>から発出して別のビュシス(もの)へと急ぐことによって、両者すなわち<不可分で第一位のもの>と<諸物体の領域に属しもする>のであって、

つまり<諸物体に付属している分割可能なもの>との中間に位置を占めているのである

これに対して、われわれが「<不可分なる有>に隣接するがゆえに右に述べたビュシス(もの)の上位にあるとみなしているもの(魂)は<有>であるとともに諸物体に属しもする>のであって、

諸物体の領域では分割されることにもなるのであるが、諸物体に自己自身を与えるほどに分割をこうむることはないのである

そして、魂が諸物体に宿る時には、たとえ<あらゆる方向に広がりを持つ能大な物体に宿るばあいであろうと、その物体の全体に自己自身を与え、しかも己れがーつであることを失うことはないのである

しかし、魂は物体が一つであるようにしてーつであるのではない

60 なぜなら、物体は連続によってーつなのであり、その各部分はそれぞれ異なったものとして異なった場所を占めているからである

だが魂は、性質が一つであるようにしてーつであるのでもないのである

——実にこれを魂であると、われわれのみなすところのものなのであるが——

それで、<分割可能なものでもなければ同時に不可分のものでもあるビュシス(もの)>は、

連続体が一つであるようにして異なった諸部分を持っているがゆえにーつであるのではなくて、自己の宿る物体のあらゆる部分に内在していているから<分割可能なもの>なのであり、

すべての物体に全体として内在し、かつ物体全体のいかなる部分にも全体として内在しているから<不可分のもの>なのである

パテーマを与えるエイドス

46 つまりそれは、色彩や性質一般と同様のあり方をしているのではないのであって、後者は諸物体の多くの黒の多くの部分に同じ性質として内在してはいるけれども、

個別的な物体に内在しているものは、その物体の黒が別の物体の黒から分離している限り、別の物体に内在しているものから完全に分離しているのである

それに、たとえ大きさを持っている物体)が一つであっても、その各部分にある同じものの(として の性質)は「影響をともにする」という点でたがいに共同関係を持つことは決してないのである

なぜなら、この部分にある<同じものは、あの部分にある<同じものっとは別だからである

というのも、そのばあいにはパテーマ(性情)が同じなのであって、ウーシア(本質)が同じなのではないからである

分割は物体の受ける作用である

67 この事実を観照した人は、魂の偉大さとそのかを観て、魂が<神に譲るある素晴らしいもの>であることや、<事物を超えた真実世界>の一員であることを知るであろう

魂は<大きさを持っていないもの>であるけれども、ありとあらゆる大きさとともにあり、ここにもあり あそこにもあるけれど も、ここやあそこにあるものはその魂の異なった部分ではなくて、同じ部分なのである

すなわち、物体はもともと分割されることを特性としているのであるから、魂を<部分のないもの>として受けいれることはできず、

そこで魂は、諸物体の領域ではく部分にしたがって、ただ自己自身のみであるばかりにはそなはしてとどまっているのである

だから、分割はあくまでも物体の受ける作用であって、魂の受ける作用ではないのである

したがって、魂は部分に分けられているとともに部分に分けられていないとも言えるのである

いや、むしろ、魂それ自身は部分に分けられているのではなくて、部分に分けられていないとも言えるのである

2
魂というものは、右に述べたようなあり方をしていなければならなかったのであって、このあり方に反して不可分なものとしてのみあるばあいにも分割可能なものとしてのみあるばあいにも、

ともに魂たることをえず、魂としてあるためには、どうしても右に述べられたような意味で不可分なものであるとともに分割可能なものであるものでなければならなかったのであるが、この事実は次に述べることからしても明らかであろう

5 もし魂が物体のようにそれぞれ異なった諸部分を持っていたのであれば、それぞれの魂も部分が影響を受けても、別の部分はその影響に気付かず、

たとえば指の領域にある魂だけが、別の独立した魂として、その影響に気付いたことであろう

そして要するに、われわれ各人を管理する多くの魂があることになったであろうし、さらにこの宇宙を管理するのは一つの魂ではなくて、たがいに独立した無数の魂でもあることにもなったであろう

というのも、事実、「知覚は伝達によって魂の指導的部分に達する」という彼らの誤った強說を受けいれてはならないからである

11 すなわち、連続に続き(ストア派の)説は、<一つのもの>に奉仕するのではなくて、

ストア派によれば魂は物体であり、魂が諸部分に分けられたばあい、それぞれの部分が身体のどこに宿るか、その座が問題となる

彼らによると魂は頭もしくは胸がその座とされる指導的部分の他に、視覚、嗅覚、聴覚、味覚、触覚の五官と、言語および生殖を司る部分に分けられる

指導的部分は近く作用を行うが、視覚その他の感覚を司る部分から伝達された感覚内容に承認・同意を与えるのがその役割である

なぜなら、第一に、<魂の指導的な部分がいついつの彼らの発言は、適切な考察を経て言われたことではないからである

14 というのも、(彼らの説のとおり)もし魂が物体であるとすると)彼らはどのようにして魂を分割し、魂のこの部分と あの部分はそれぞれ別であると主張するのであろうか

もし魂が一つの連続した塊であれば、そのそれぞれの部分をどれほどの量とどんな質の相違に基づいて分け、この部分とあの部分とは別であると主張するのであろうか

18 そしてさらに、<魂の指導的部分のみが知覚するのであろうか、それとも他の部分も知覚するのであろうか

19 そこで魂の指導的部分のみが知覚すると仮定してみよう

21 他方、知覚内容がそれの魂の他の部分に出会うのであれば、その部分はもっとも知覚作用を行わないことになっているのであるから、その部分が自己自身のパテーマ(経験)を指導的部分に伝達することはないであろう。要するに決く作用も成立しないことになるであろう

35 しかし他方、もし魂が完全に一なるものであって、たとえば<絶対に分割されないもの>で<自分だけで一なるものとしてとどまっているものでもあれば、そして多や分割の難いからは完全に自由なあり方をしているのであれば、

たとえばものは魂の所有することろのものとはなっても、それの全体が<魂のあるものとなることとはあしてないであろうし、

魂は自己自身を最別的な生きものの いわば中心に据えはしてもし、その生きものの 言全体の ほうはこれを魂のないまま にほうっておくことになるであろう

31 ——他方、もし魂の指導的部分だけが知覚するのではなくて、他の何らかの部分も知覚するのであれば、なぜ一方は指導的部分で、他方はそうではないのであろうか

なぜ知覚は、彼らの言う<指導的部分>を通ずる必要があるのだろうか

それに、耳や目のような多くの感覚からくる知覚内容が、どのようにして彼る一つのものとして認識されることになるのであろうか

40 そのゆえ、以上の論述に誤りがないとすれば、魂は<——>であるとともに<多>であり、<部分に分けられているものっであるとともに<不可分なもの>でもあるのではなければならず、

「同じ一つのものがいたるところにあるのは不可能ではなかろうか」と疑っては ならないことになる

万有の管理者は<多なる一>でなければならない

というのも、もしわれわれがこの事実を受けいれなければ、<万物を まとめて管理するもの>が、すなわち<万有を一括して自己自身のの内に含み持ち、思慮深く導くもの>がないことになってしまうからであって、

その万有の管理者は諸存在が多であるから自分も多であるが、諸存在を まとめるものは一つ でなければならないから 自分も一つでなければならず、

自己自身が<多なる一>であることによって部分なもののすべてに生命を与え、自己自身が<不可分なー>であることによってそれらを思慮深く導くのである

そして<思慮のないもの(物体)>は、この<一つのもの>によって指導者を模倣するのである

してみると、これが(ティマイオス)のなかで)神の御業として語られている疑めいたことは、

すなわち、「神は不可分で常に同じ状態を保っているウーシア(存在)と諸物体の領域に生じる分割可能な存在との中間に、

その両者から、第三の種類の存在を混ぜ合わせてお作りになった」ということの意味することになる

それゆえ、このような意味で魂は一で多であるが、諸物体のなかにあるエイドスは多で一であり、諸物体は単純に多であって、最高位のものは単的に一であることになる